



田代 信雄  
東京都・タシロイーエル

心の荒廃の時代

作家の瀬戸内寂聴尼僧は今年で90歳になるそうだ。その寂聴尼僧が以前「私が生きてきたなかで、いまが一番悪い時代になった。戦争中のほうがまだよかった」と、語っていた。マザー・テレサは先進国にも救いの手を差し伸べたとき「飢えて苦しむ人はいないが、心の飢饉で苦しんでいる」と、話していた。私は戦争中のことは解らないが、いまの時代が異常であることは肌で感じるが多々ある。

グローバルスタンダードの名のもと、過当競争が激しくなっている。大手電機メーカーの社長たちがいまの経営はオセロゲームのようで、一手で白黒が逆転してしまうので勝組に入っているにも強い不安を抱くと、いっている。勝っても負けても多くの人が強い不安にさらされながらの生活が続いている。心が荒廃してしまうのも仕方ないかもしれない。

幕末も時代が荒れていて心が荒廃していた。そんななか、二宮金次郎(尊徳)は農民救済に勤めた。二宮金次郎が、はじめて公の仕事に任されたのは桜町という町である(現在の栃木県二宮町)。小田原藩の分家の土地である。小田原藩主、大久保忠真から桜町の復興を依頼される。はじめは固辞していたが交渉の末、全権をもらい引受けることになる。桜町の隅々まで調べた結果、町の人心が荒廃していた。農民は毎日のように賭博・酒・喧嘩に明け暮れ、まったく働こうとしなかった。桜町は豊かな水田地帯だが重税などから働く意欲をなくしていたのである。

金次郎はまず心の荒廃を正さなければ復興はあり得ないと考え、行ないのよい者や一所懸命に働く者を表彰し、悪い者は諭して行ないを正し、貧困者には食べ

ものを与え、用水路をつくり荒地を開墾するなど、夜が明けないうちから夜遅くまで雨の日も嵐の日も、毎日毎日一所懸命、復興に努めたのである。金次郎の姿を見て少しずつ村人も感化されていき改心する者も出るが、復興開始から8年くらいまでは足をひっぱったり、反発したりと金次郎でさえ復興をあきらめる事態もあった。しかし、金次郎の理解者も年々増えていき10年で復興第一期を完了させることができたのである。

金次郎は桜町に来るとき、自分の家・田畑のほとんどを売却し、その資金といままで貯めたものすべてを持って桜町復興に賭けた。そして小田原藩からは金銭的援助は受けずに復興することを決意した。金次郎の前にも、何人もの人が桜町復興に取組んだが、いくらお金をつぎ込んで復興することができず、封建時代では異例となる農民・金次郎に復興依頼を、せざるを得なくなるのであった。

金次郎以前の復興は、金銭的援助が中心のため村人が自立しなかった。自立しないどころか依存心が強くなったり、その金を我がものにしようとする既得権益者が現れる始末で、この既得権益者が金次郎の復興を遅らせる要因にもなったのである。金次郎は村人に自立を即すとともに、自立の方法、農作物のつくりかた、貯蓄の方法など生活全般から人生の生きかたまで教育していったのである。

金次郎の貧困者救済は秀逸である。貧困者にはまず食べものを与える、そして働けるように農具を与え耕作方法を教え、勤勉に働く意味を教えていき自立させていく。しかし、食べもの、農具、お金はあげるのではなく貸すのである。金次郎の資金は金次郎や農民庶民の善意の資金である。

善意の資金から貸してあげて立直らせる。そして貧困から脱出したら、その人のできる範囲での推譲金(寄付)を求める。強制的ではなく、推譲金の意味を教え諭して、出してもらうのだ。金次郎の個人的な小さな推譲金からはじまった復興活動は、金次郎の晩年に幕府領・日光御神領開発をしたときには、八千数百両という多額の資金を投入することができるようになっていた。農民庶民の小さな善意が集って大きな仕事を成し遂げることができたと思う。そして多くの民が救われたのだ。

この金次郎方式は現在でもあちこちで応用されている。北海道・土幌町、人口7200名の小さな町で金次郎方式の農協をつくった。町民皆が分度・分限をわきまえ我慢して余財を蓄え3年間で35億円の資金をつくり、大きな農産物の加工工場をつくらせて運営をはじめた。北海道でも最も貧しい町が、いまでは日本でもトップクラスの農協になって貧困から脱出した。

めざしの財界総理といわれた土光敏夫元経団連会長の言葉を記したい。

「百五十年も前、二宮尊徳先生は、全国六百余か所の地で荒廃した農村の復興、藩の財政再建に成功された。没後は門弟によって二宮先生の徳が継承され、いまも活動が続いている。二宮先生は、至誠を本とし、勤労を主とし、分度を体とし、推譲を用とする。報徳実践の道を唱え実行されたが、その手法はきわめて科学的であり経済理論にもかなうものでありました。(中略) 二宮先生の思想と実践方法を多くのかたがたに研究・会得していただき、応用していただきたいと想うのであります」

このように明治から昭和前期にかけて二宮金次郎の思想が経済界にもよい影響を与えていた。戦後の

急速な復興の陰に、二宮金次郎の生きかたが大きく影響していたと思う。国民一人一人が自立していなければ強い国にはならないのではないではないだろうか。現在のように年収200万円以下の人が1000万人以上もいるような社会では、未来に光を見いだせないのは当たり前だろう。

競争だけではよい社会はつukれない。

二宮金次郎の仕法

二宮金次郎(尊徳)は勤勉・儉約・推譲の三本柱で人の道を説いていた。勤勉はいうに及ばず、よく学びよく働くこと、儉約はケチケチすることではなく人それぞれの収入に応じた生活をする、推譲は譲ること。

金次郎はとくにこの推譲を重要視し、人としてなすべき道であると、説いていた。推譲には自譲と他譲の二つの道がある。自譲とは自分や家族に明日の蓄えをすること、預金やマイホーム購入がこれにあたる。他譲は親戚・知人・地域社会・国家に譲ることである。自譲は教わらなくても自然にできることであるが他譲は教え諭してもなかなか身に付かないことである。

もう一つ、「積小為大」。金次郎のモットーである。金次郎の生家は洪水で田畑が流されそのショックで父親が亡くなり、後を追うように母親が亡くなり没落してしまう。捨てられていた米を荒地に植えることをはじめたのは16歳の頃である。コツコツと小さいことを積み重ねて、数年で没落した生家を復興し、晩年には多くの農民を救済するに至った。

「道徳を忘れた経済は罪悪である。しかし、経済を忘れた道徳は寝言でしかない」これも金次郎の言葉である。

いまこそ日本に必要な思想ではないだろうか。